私の履歴書

谷口吉生 ⑰

猪熊先生

1955年、長野県の軽井沢に「画架の森」という長屋形式の別荘ができた。

洋画家の猪熊弦一郎先生に絵の手ほどきを受けていた素人画家10人がへそくりを出し合って建てたもので、真珠のミキモトの社長だった御木本美隆氏が安い土地を探してきて、父が設計。長屋仲間には猪熊さんのほか政治家の森清氏、作曲家の服部良一氏らがいた。毎年夏になると家族ぐるみで野外パーティー。たき火を囲んで服部さんが私たちのために作った「森の歌」を歌った。歌手のジョン・レノン氏とオノ・ヨーコ氏が遊びにいらしたこともある。

戦前のフランス留学で藤田嗣治らと親交を深めた猪熊さんは、長屋ができた頃に再びパリに向かった。ところが途中に立ち寄ったニューヨークに魅了され、およそ20年を過ごすことになる。自由で飾り気のないこの街の雰囲気は、猪熊さんの人柄そのままだ。パーク・アベニュー近く95丁目の自宅はサロンのように人が集まり、日本から出張してくるビジネスマンも出入りした。猪熊さんは彼らを夫人の手料理でもてなし、自らニューヨーク近代美術館（MoMA）へと案内した。これからのビジネスマンはお金を稼ぐだけでなく、芸術もわからないと尊敬されないと言って。

「駅前に現代画 知る場を」

丸亀の美術館設計 任される

その猪熊さんから「故郷に美術館をつくるから設計してほしい」と依頼された。89年、少年期を過ごした丸亀市に作品を寄贈したのを機に「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・図書館」の設立が決まった。丸亀駅の目の前という立地は、買い物ついでに現代アートを気軽に楽しんでほしいという、画伯たっての希望だ。瀬戸大橋の完成と鉄道の高架化で駅前が空き、私が駅前広場と美術館を設計することになった。

駅を出てすぐ目に入る壁画がこの美術館の象徴だ。広場に面した壁に絵を描いてほしいとお願いすると数十枚のスケッチを下さった。女性のヌード、○と×ばかりの抽象画など。さすがに公共の美術館の正面には無理だと断念。

ある時、画用紙に絵を描きだした。ヘリコプターに馬、オモチャ。見る間に楽しげなモチーフで紙が埋まる。ところが私は「もう少し余白がある方がよいのではないですか」と、大半を白い修正液で消してしまった。即座に自分の浅はかさに気づき謝ったが、しばらくして「こっちのほうがいいね」と言われたのには驚いた。90歳近い画伯は若輩の意見に耳を傾ける柔軟な心をお持ちだった。美術館の「顔」として市民に愛される壁画はこうして生まれた。

美術館の建築現場で猪熊弦一郎氏㊧と

「おおらかな空間にしてほしい。後は任せるから」。私は大きなスケール感を出すため、美術館の正面を駅前広場と連続させ、巨大な門構えがある建築を配した。石材や金属パネル、ガラスなどの素材も通常の倍以上の大きさで発注。米国のランドスケープ・デザイナーのピーター・ウオーカー氏や都市計画家の加藤源氏の力も借りて、周囲の環境と一体の美術館ができた。

完成後「展示室は大きくしてとは言ったけれど、これほどとは思わなかった」と上機嫌。すぐに2枚の絵を合わせて一つの額縁に入れ、壁に掛けた。建築のプロポーションに合わせて作品をふくらませる発想はいかにも猪熊さんらしい。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ⑱

東山魁夷画伯

日本画家の東山魁夷氏が長野県に500点余りの作品やスケッチなどを寄贈するというニュースがテレビで流れた。1987年のことである。

画伯が画学生のころから写生旅行で信州の雄大な自然を描いたことは知っていたので、〝第二の故郷〟に絵が里帰りするのだと感慨にひたっていると、電話が鳴った。寄贈作品を展示・収蔵する美術館を設計してほしいという、東山さん自身からの連絡だった。

父が設計した東宮御所に壁画を制作された画伯とは以前から親交があった。77年にパリの「唐招提寺展」に障壁画を出品した時に父と展示構成を手伝い、その後も多くの「東山魁夷展」にかかわることになる。90年に完成した「長野県信濃美術館・東山魁夷館」だけでなく、この美術館を見下ろす場所に建てられた東山家の墓所、さらには「香川県立東山魁夷せとうち美術館」（2005年完成）の設計も任せていただいた。

「美術館設計して」と電話

作品の印象に景観合わせる

長野市の東山魁夷館は、信濃美術館という既存の美術館に併設されている美術館だ。中心部の城山公園の一角にあり交通の便はよいが、周辺は野球場や駐車場になっている。そこで私は、近隣の景色を〝改変〟して建築と関連づけ、東山芸術にふさわしい場所を借景によって作ることにした。

敷地を50㍍四方の正方形で区切り、低い壁で取り囲む。その敷地の東南部分に美術館を配置し、残りの部分は水景のある庭。敷地を区切ったのは、隣接する既存館に対して新たな美術館の領域を明確にする意味がある。何より正方形という完成された図形によって永久不変の美術館を象徴させようとした。人工池の水は極端に浅くして、水底に貼った淡いグレーの石を透かしてみせる。低い壁が近くの日常的な風景を隠し、庭のかなたに信州のやわらかい山並みの遠望を際立たせる。

私が美術館の設計に用いるのは、シナリオに沿って動画を構成するような手法だ。建築の中を人が歩くにつれて、展示作品へ向かう視線が移動し、窓越しの風景も移り変わる。館内を一巡することにより、作品からの印象と同時に美術館がなぜそこに建っているのかを体感できる建築だ。

香川県立東山魁夷せとうち美術館もそんな動画を意識して設計している。瀬戸内海に面した敷地のすぐ目の前に瀬戸大橋、遠方に東山家ゆかりの櫃石島が見える。私はあえて敷地の入り口側からは見えないように海と島への眺望をすっかり隠した。

香川県立東山魁夷せとうち美術館（北嶋俊治撮影）

来館者は立木の間を抜け、美術館に入る。外壁には東山画伯が最も好んだ青緑色の石板を使っており、これから出合う美しい日本画への期待感が高まる。吹き抜けの大空間の展示室、リトグラフ用の細長いギャラリー空間で作品を鑑賞した後、さらに歩みを進めて1階のラウンジに下りると突然、目の前に海への眺望。東山家の発祥の地である櫃石島と対面して初めて、来館者はこの美術館と存在場所の関係を知る。

建築の完成後、美術館入り口に至るまっすぐな道が、画伯の代表作「道」によく似ていることに気がついた。戦後まもない50年、絵の道を切り開く強い意志が込められた清澄な作品だ。後に葬儀会場のデザインを東山夫人に依頼された私は、白い花を会場に敷き詰め「道」を再現し、画伯を送った。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ⑲

慶応義塾の建築

思い出に甦る「風景」に

落ちついて勉強できる環境

東京の天現寺にある「慶応義塾幼稚舎本館」の建築は1937年、私と同じ年に生まれた。今年、ちょうど80歳。

この現代的な校舎が戦前にできたと聞いて驚く人は多い。設計者は30代の若き建築家だった私の父、吉郎。幼稚舎理事の槇智雄氏（建築家・槇文彦氏の伯父）は父に設計を依頼し「塾の建築に魂を入れてほしい」と話されたそうだ。

父は、教室の日当たりをよくするため、南面は床から天井までの窓で開放し、フロアヒーティングも導入。教室のテラスから直接校庭に避難できる階段を設置するなど、生徒の安全、健康、衛生に配慮した鉄筋コンクリート校舎の先駆だった。

その後、父は慶応義塾の多くの施設設計に携わった。大半は戦後のキャンパス復興に関するもので、解体された建築も多い。幼稚舎の翌年に完成した「大学予科日吉寄宿舎」は異なる設計者によって改修されて現存。代表作品の「新萬来舎」は部分だけを移築、「学生ホール」は猪熊弦一郎氏による壁画だけを移して建築は解体されている。

大学が保存に尽くした結果ではあるが、敷地から移築した建築の部分や元の場所から切り離された壁画を見るのは痛々しく寂しい思いもする。

私が50歳の時、竣工50周年事業として幼稚舎から体育館の設計依頼があり、初めて慶応義塾の施設に携わった。

私は父が設計した既存の建築とどう関連づけるかに迷った。本館、自尊館、記念棟の3つは時代によって作風が異なっていたからだ。考えた末、私の作品と共通点が多い本館を選び、水平に延びる白い校舎と連続するように体育館を設計。法律の制限から高さを低く抑える必要があったため、アーチ型の梁を取り入れ、床を地上より下に沈めて体育館に必要な大空間ができた。床と地上との間にできた段差部分は、先生が生徒を指導したり、生徒がプレー中の友人を楽しく応援したりするバルコニーとして活用する。

体育館が完成した5年後の92年には「慶応義塾湘南藤沢中・高等部」、2002年には再び幼稚舎に食堂と教室が入る「新館21」を設計。藤沢中・高等部の増築も依頼され、現在も新しい増築計画の設計中だ。建築の竣工後は建て主との交流が途絶えてしまうことが多いが、増改築のたびに相談してくださる慶応義塾の方針を私はうれしく思う。

慶応義塾湘南藤沢中・高等部（新建築社写真部提供）

「藤沢中・高等部」の校舎は大学の敷地内にある。そこで教室の列で囲った「コの字形」のキャンパス空間を作り、生徒たちが6年間の楽しい共同生活を過ごせるようにした。学校内の教室は廊下や階段という「道」で縦横無尽につながれ、集うための「広場」を随所に配した。先生や生徒たちは、「道」や「広場」を行き来しながら出会い、会話をする。変化に富んだ街のような学校にして、遠い将来、生徒たちの思い出に甦る「風景」も作りたかった。

教室の床には、ブルーグレー色のタイルカーペットを敷きつめ、生徒が集まる場所にはベンチを置いて絵も飾った。エネルギーがあり余る中・高生が少しでも落ちついて勉強ができるようにという配慮である。

建築はこのように、その空間にいる人間の行動や精神にさえ働きかける力を持っていると思う。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ⑳

豊田市美術館

現代漆芸家の重鎮、高橋節郎氏が事務所を訪ねてこられた。豊田市が計画中の美術館に、氏の作品を展示する美術館も併設される。土門拳記念館などを見て、私に設計を依頼したいと話された。

愛知県豊田市は、かつて挙母市と呼ばれた城下町である。現在はトヨタ自動車の本拠地として有名だが、町には今も江戸時代に築かれた城の跡が残る。建設予定地はその歴史ある高台の一角の、新しい町並みを見下ろす場所にある。この歴史の交点に位置する敷地をどう生かすのかを私は設計の課題に据えた。

新しい町並み 見下ろす

茶室設計 父の手法引き継ぐ

乳白色のガラスで覆った白い常設展示室を中心とし、その両端に緑色の石板を貼った企画展示室、高橋節郎館の2つを置く。なだらかな坂をのぼって美術館に入った来館者は、3つの展示室を巡り、屋外の回廊へと誘われる。回廊からは、水を張った庭を隔てて城の隅櫓が望め、振り返ると眼下に新しい町が見渡せる。この新旧の景色が同時に見える場所にはカフェテラスも設けた。

外壁に使用した乳白色のガラスは、昼間は日光を制御して、柔らかい均一な光に満ちた空間を作る。一方、夜は巨大な行灯になって周辺の庭園を照らし出す。緑色の石は米国バーモント州産の特殊なスレート石。建築の外装に使われることはほとんどない美しい色の石だ。

幾何学的なパターンと自然の形を組み合わせた庭は、米国のランドスケープ・デザイナー、ピーター・ウオーカー氏が手掛けた。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館や日本アイ・ビー・エム幕張テクニカルセンターでも協働したピーターは、ランドスケープ・デザインの概念を覆した人物である。建築や都市と一体となった外部空間を設計する方法により、ランドスケープをいわゆる「造園」から都市デザインへと発展させた。

豊田市から美術館に併設する茶室の設計も依頼され、私は初めて日本建築の伝統と正面から向き合うことになった。実は1960年代に米国留学から戻った時、和風建築を専門的に手がける工務店などで日本建築の基礎を学ぶことを父から勧められていたが、あまり関心を持てずにいた。

空から見た豊田市美術館（CENTER PHOTO JAPAN提供）

論理的なモダニズム建築に比べると、数寄屋などの建築は感覚による建築といえるだろう。梁と柱の構造があるだけで、あとは素材の組み合わせも全体と部分のバランスも自由に決められ、設計者の個性がにじむ。この茶室の設計にあたっては、長く父を支えた水澤工務店出身の吉橋栄治氏に協力をお願いし、父の和風建築を徹底的に学んだ。

私の建築と父の建築は、考え方も手法も非常に異なっている。父の建築の増改築などを依頼されると、私自身の建築と明確に区別し、あたかも父であるかのように改修を行おうと努めてきた。しかし、豊田市美術館の茶室の設計以降の和風建築では、父の手法を引き継ぎつつ、自分の作品として設計することができるようになった。

和風建築とは難しいもので、材料と微妙なプロポーションの違いや大工さんの手仕事によって、同じ図面からでも異なる建築ができあがってしまう。私の和風建築は父を「襲名」する可能な域に達していると思うが、もし父が見たらまだまだと言うに違いない。

（建築家）